

行基の歌

『日本霊異記』 中巻第二縁

大塚 千紗子

一、はじめに

『日本霊異記』（以下、『霊異記』）の中には、歌を含み持つ説話が幾つか存在する。そこに見える歌は、事件の前兆を仄めかす童謡の如き歌と、上巻第二縁、上巻第四縁、中巻第二縁の説話に付随した歌である。後者の歌については説話内容に合わせた改変が行なわれた歌と指摘されるが、そこには歌を求める必要性があったものと考えられる。本稿は行基説話の一つである中巻第二縁（以下、本縁）の歌が説話内においていかなる意義を有するのかについて考察する。

二、問題の所在

本縁は以下に掲げる標題が示すように、「烏の邪姪」「世を駄ふ」「善を修す」の三つが説話全体を構成するキーワードと考えられる。本縁は烏の邪姪を見た血沼原主倭麻呂が世を厭い、出家して行基の弟子となり善を修しながらも、不幸にして彼は行基に先立つて死ぬことになる。そして行基の歌へと展開する。最後に説話全体への評語が加えられて、出家した倭麻呂を讚す

る「賛曰」によって纏められている。本稿では、説話の構成上から本縁をAからEまでの五段落に分けて掲げる。

【烏の邪淫を見て】世を駄ひ、善を修せし縁 第二

A 禪師信嚴は、和泉国泉郡の大領、血沼原主倭麻呂なり。聖武天皇の御世の人なりき。此の大領の家の門に大樹有りき。烏、巢を作り兒を産み抱きて臥せりき。雄鳥は遐邇に飛び行きて食を求め、兒を抱ける妻を養ひつ。食を求めて行ける頃に、他鳥、シゲガヒ遷二来りて婚ブ。今の夫にカケ奸ミ婚びて、心に就きて共に高く空に翳り、北を指して飛び、兒を棄てて睽みず。時に先の夫の烏、食物を嘔み持ち来りて、見れば妻烏無し。時に兒を慈び、抱き臥せりて、食物を求めずして數の日を経ぬ。大領見て、人をして樹に登り、其の巢を見しむるに、兒を抱きて死にをり。大領見て、大きに悲しび、改心し、【烏の邪姪を視て】、世を駄ひ、家を出でぬ。妻子を離れ、官位を捨て、行基大徳に随ひて、善を修し道を求めき。名をば信嚴と曰へり。但し要す語りて曰はく、「大徳と俱に死なむ。必ず当に同じく西方に往生せむ」といへり。

B 大領の妻も亦血沼県主なり。大領捨つと者へども、終に他心無く、心に慎ありて貞潔なり。爰に男子、病を得て命終の時に臨みて、母に白して言はく、「母の乳を飲まば、我が命を延ぶべし」といふ。母、子の言に随ひ、乳を病める子に飲ましむ。子飲みて歎きて言はく、「嗚呼、母の甜キ乳を捨てて、我死なむか」といひて、即ち命終しぬ。然して大領の妻、死にし子に恋ひ、同じく共に家を出で、善法を修め習ひき。

C 信嚴禪師、幸無く縁少なくして、行基大徳より先だちて命終しぬ。大徳哭き詠じ、歌を作りて曰はく、

鳥といふ大をそ鳥のことをのめ共にと言ひて先だち去ぬる

D 夫の大きいなる炬あらむとする時には、先づ蘭松を備く。雨降らむとする時には、兼ねて石坂潤ふ。鳥の鄙ナル事を示して、領、道心を発しつ。先善の方便に、苦を見、道を悟ると者へるは、其れ斯れを謂ふなり。欲界雑類の鄙なる行是くの如し。賦ふ者は背き、愚なる者は貪ル。

E 贊に曰はく、「可しくアルカナ、血沼県主の氏。鳥の邪姪を瞰て、俗塵を黙ひ背けり。浮花の仮趣にして、常に身を淨くし、修善に勤め、恵命を祈る。心に安養の斯を尅み、是の世間を解脱せり。異に秀レニタル厭士なり」と者へり。

A・Bは倭麻呂夫婦の出家である。Aは妻鳥の邪姪によって夫鳥と兎が死に、この顛末を見た倭麻呂は世を厭い、行基に師事し出家をして信嚴禪師と戒名する。Bは倭麻呂から離縁され

た妻の話であり、妻は男児の病死を機に「家を出で、善法を修め習ひき」と出家をする。Cは、信嚴の死とその死を悲しんだ行基の歌を記す。Dは本縁への評語であり、物事には必ず前兆があることの例証を示す。「欲界雑類の鄙なる行」とは「鳥の邪姪」であるだろうが、そこに象徴された世間の汚濁に気付いて背く者、貪る者との二者がおり、倭麻呂は前者であった。Eはその倭麻呂への賛である。先のD評語で示した欲界雑類である世間から脱し、「修善」に勤めて解脱を達成した倭麻呂を賞賛している。

本縁は鳥の邪姪を契機として倭麻呂が出家を行なうが、こうした出家のあり方を松浦貞俊氏は「異様なこと」と指摘して「それを警戒は、佛が方便に異事を示したものと解釈して本篇を綴つた」と、編者景戒の解釈による記述であろうとの見解をした。『靈異記』において出家動機を記す説話は他に、聖徳太子の死去を機とした太子の従者、大部屋栖野古（上巻第五縁）、「出家して仏法を修学せむ」（中巻第二縁）と願った金鷲優婆塞や、「七歳より以前に、法華八十花嚴を転読せり。默然りて逗らず。終に出家を樂ひ」（下巻第一九縁）と幼少より才智を見せた尼などがある。これら出家動機は太子への忠義や仏道への帰依によるものであり、悪い事象を契機とした出家譚は異例といえる。信嚴はその「世を黙ひ」という厭世的動機によって往生を遂げ、E賛曰は信嚴を「異に秀レニタル」と賛する。しかし行基は「大徳哭き詠じ」と、賞賛されるべき信嚴の死を泣き悲しむのである。この行基の悲しみと歌の詠出とは密接に関わると考えられる。

この行基の歌の詠出動機について中田祝夫氏は信厳が行基に交わした「要す語りて〔要語〕」以下の内容から「死なばもろともにと言つて約束したのに、信厳は先に死んだと、(愛情を含めて)恨んだもの」と解釈して、歌意と詠出動機に愛惜の意を見出した。行基は弟子に要語を破られ、先に往生を遂げられて泣き悲しむ。このために本縁は行基の徳を示すことや行基の菩薩としての性質を示すものとは一見して捉えにくく、僧である行基の詠歌が本縁に何をもたらずものであつたのかを検討すべきと考える。

三、「鳥」の歌

問題とする行基の歌を以下に再掲する。

1. 鳥といふ大をそ鳥のことをのめ共にと言ひて先だち去ぬ
(靈異記)中巻第二縁

歌の三句目「ことをのめ」について真福寺本『靈異記』には「去止平能米」とあるが、狩谷椋斎の「疑ハ能美ノ之譌」や鹿持雅澄の「米ノ字は未の誤ふるべし」という指摘によつて多くの注釈書は「ことをのみ〔能未〕」と校訂を行い、限定の意(言葉だけ)として解釈した。真福寺本のまま解釈を行なう立場は中田祝夫氏と多田一臣氏の両氏であり、中田氏は「のめ」を「頼む」の連用形で「あてにさせて」と解釈する。『靈異記』中下巻の善本は真福寺本であるから「能米」に校訂を行うべきではないと判断し、本稿では中田説に従いたい。下二句の「共に」と言ひて先だち去ぬ」は「共に」との約束をしたにも関わらず、先に行かれて取り残されたということであり、散文部と照

合すれば先に往生をした信厳を指す。

この歌は『万葉集』巻十四・三三二一番歌の東歌を援用しつつ、説話内容と首尾呼応させたものと屢々指摘されているように、『万葉集』の影響が歌の詞章から見て取れる。

2. 鳥とふ大をそ鳥の真実にも来まさぬ君を尻ろ来とそ鳴く
(巻十四・三三二)

歌の意は、鳥の「尻ろ来」という鳴声が、あたかも自分の元へ恋人が来ることを鳴いて伝達しているように聞きなすが、「真実にも来まさぬ君」と実際に恋人は詠み手の元へは来なかつたというものである。この東歌と行基の歌とは上二句の詞章を共通しつつも、二句目以降は歌の趣向が異なる。しかし、詠み手が求める相手の不在と鳥への罵倒という点においては共通するだろう。

この「大をそ鳥」は「大嘘鳥」(『万葉集佳詞』)など、古注釈は「大嘘鳥」と、実際には相手が来ないにも関わらず「尻ろ来」と鳴く嘘つきの鳥と解釈されてきた。しかし、「をそ」を嘘の意で採ることは甲乙の点に問題があるために「恋ふと言はばをそろとわれを思ほさむかも」(巻四・六五四)、「咲く花もをそろはうきを」(巻八・一五四八)の「をそろ(軽率)」から『佐佐木評釈』と『全註釈』以降の注釈書は軽率の意と採る。『靈異記』の行基の歌においても「大をそ」は「大嘘」の意と解す傾向にあるが、東歌と同様に軽率な鳥として理解するのが穏当だろう。この東歌のほかに、『万葉集』には鳥の鳴声を詠む歌として以下の例がある。

3. 暁と夜鳥鳴けどこの山上の木末の上はいまだ酔けし

(巻七・二二六三)

4. 朝鳥早くな鳴きそわが背子が朝明の姿見れば悲しも

(卷十二・三〇九五)

3は夜明けに夜鳥が暁を知らせるように鳴くが、山上の木末はまだ静かであることだと詠む。鳥が夜明けを告げることは男との逢瀬の時間が終わることである。そのために、鳥は鳴くが「いまだ静けし」と逢瀬の時間を引き延ばそうとする女の歌である。4も明け方に鳴く鳥の習性に寄せて詠まれる。鳥の鳴声は朝の訪れを告げることであり、それは男女の逢瀬を引き裂くものでもあった。3、4はその鳴声によって逢瀬の時間を引き裂く鳥として歌に詠まれているが、東歌の鳥もその鳴声によって非難されていた。漢詩集において鳥は孝養の鳥として登場するが、それとは異なり、鳴声によって男女の逢瀬を阻む要因として、またはその鳴声から嘘を告げるといった如くに忌まわしい鳥として詠まれているのである。鳴声によって男女の逢瀬を阻む要因として、または恋人の到来を期待させておきながらも、その期待が達成されない場合において鳥の鳴声が歌の中に配置されている。行基の歌の鳥も、『万葉集』に詠まれる忌まわしき悪鳥のイメージに寄せながら「ことをのめ共にと言ひて先だち去ぬる」と結ばれる。先述のように「ことをのめ」について現段階では明確な意味と解釈は見出せないが、「こと」とは説話部において行基と共に死ぬとの約束をしたにも関わらず先に死んだ信蔵の「言」を指しており、自ずと「先立ち去ぬる」対象は「共に」との約束を残して去った信蔵となる。

約束をした言葉と現実との乖離を歌によって詠む例を以下で確認したい。

5. 忘れ草わが下紐に着けたれど醜の醜草言にしありけり

(卷四・七二七)

6. 言のみを後も逢はむとねもころにわれを頼めて逢はざらむかも

(卷四・七四〇)

7. ありありて後も逢はむと言のみを堅め言ひつつ逢ふとは無しに

(卷十二・三一一三)

5は、恋の辛さを忘れられるという忘れ草を自分の下紐に結んだが、その名の通りに忘れることが出来ない事を憎み「醜の醜草」と詠む。6は「後も逢はむ」という言葉だけで、逢瀬を遂げようとしなない相手に対する不信任感が示される。7は「逢うとはなしに」から、実現しない逢瀬であったことが知られるのであり、逢瀬を約束したにも関わらずそれを実現させなかった相手への怨恨と批難とが込められている。5の「言にしありけり」は、物の名とは反対にその言葉のような効果を現実には得られなかったことにおいて使用され、6、7の「言のみ」は相手からの言葉を頼りにしたものの、その言葉が現実には叶わなかった過去を詠む。これらの歌には相手から発せられた逢瀬の言葉が「言のみ」であった過去と、逢瀬への期待を裏切られたことへの批難が込められているのである。

右の例を通して行基の歌を検討するに、行基は信蔵の言葉を頼りとしたにも関わらず、それが果たされない言葉となったことを愛惜の意を以て批難しているのである。批難の内実は「鳥といふ大をそ鳥」と、悪鳥である鳥に寄せて歌われるようにA「鳥の邪姪」の妻鳥の行為と、先だつた信蔵とを重層させていると考えられる。妻鳥は己の邪姪のために夫鳥と児を捨てて

去つたように、信敵もまた妻子を捨てて出家をする。こうした信敵の行爲は、出家の爲とは雖も結果として妻鳥と同じ行爲になるだろう。従つて「鳥の邪姪」を見て出家をした倭麻呂も妻鳥と同じであり、彼自身もまた「鳥」＝「鳥といふ大をそ鳥」なる者として位置づけられると考へる。本縁において鳥は子を捨てて去る存在であり、その鳥に比される信敵は最後に行基の元からも去ることになる。

その際、信敵に取り残されて泣く行基の姿に注目したい。「靈異記」においては高僧とされる行基がなぜ弟子の死によつて泣き、歌の詠出へと展開するのかについて次節より検討する。

四、行基の嘆きと歌の意義

『靈異記』は行基を「文殊師利菩薩の反化」（上巻第五縁）や「内には菩薩の儀を密め、外には声聞の形を現す」（中巻第七縁）、「是れ化身の聖なり。隱身の聖なり」（中巻第二十九縁）と呼ぶように、隱身の聖としての徳を備えた高僧として語る。また、母親に抱かれた赤子を見た行基が前世の因縁を見る話（中巻第三十縁）のように、行基の示した靈験や隱身の聖としての徳や知性を語る。しかし、本縁は弟子の死によつて約束を反故とされて泣き悲しむ行基の姿と歌によつて説話部が終了するため、一見して行基の徳を顕わすためのものとは言い難い。

歌の直前の文脈であるCは「信敵禪師、幸無く縁少なくして、行基大徳より先だちて命終しぬ。大徳哭き詠ヒ、歌を作りて曰はく」と行基の感情が「哭」で表現されており、信敵の死による悲しみから歌を詠んだことになる。これと同様に、詠歌の主

体者の心情が説話内の文脈に明示された後に歌へと転ずる例としては『靈異記』上巻第二縁の狐妻と夫との離別における歌がある。

8. 時に、彼の妻、紅の欄かざらぬの裳もも（今の桃花の裳を云ふ。）を著て窈窕やうたうびて裳欄を引きつつ逝く。夫、去にし容を視て、恋ひて歌ひて曰はく、

恋は皆我が上に落ちぬたまかぎるはろかに見えて去にし子ゆゑに

といふ。故に其の相生ましめし子の名を岐都禰きつねと号く。

（『靈異記』上巻第二縁）

夫は、紅の裳を引いて去る狐妻の姿を見たことで「恋ひて」とあるように恋情が喚起されて歌へと転開している。散文部で夫の抱いた妻への「恋」と、歌の詞章「恋は皆」が対応しつつ、「はろか」や「去にし子」によつて狐の妻がはるか遠くへ去ることを歌は示唆しているのである。この夫の歌を例に見れば、行基の感情を表現する「哭」や「詠」によつて行基の歌が詠出されたといえる。

この、「詠」は『靈異記』では他に雄略天皇から電を捉えることを命じられた少子部が死んだ際に用いられる。「然る後時に、栖軽卒せぬ。天皇勅して七日七夜留めたまひ、彼が忠信を詠ひ、電の落ちし所に同じ処に彼の墓を作りたまひき。」（上巻第一縁）と栖軽の死を偲び、雄略天皇は彼の墓を造営したと説明されるように、行基の「詠」は死んだ信敵を偲ぶ意であるだろう。さらに「哭」に着目すれば、『靈異記』において泣く動作を意味する語「哭・啼・泣・涕」の中でも「哭」は顕著に用

例が多い。その「哭」く対象は僧侶、在家者と様々であるが、ここでは仏在世時において仏が罪有るものを見て「哭」くという記述を挙げたい。

9. 経に説きたまへるが如し。「昔、仏と阿難と、墓の辺よりして過ぎしに、夫と妻と二人、共に飲食を備けて、墓を祠りて慕ひ哭く。夫恋ひ、母啼き、妻詠ひ、姨泣く。仏、妻の哭くを聞き、音を出して嘆く。阿難白して言はく、『何の因縁を以てか、如来嘆きたまふ』とまうす。仏、阿難に告りたまはく、『是の女、先世に一の男子を産む。深く愛心を結び、口に其の子の閉を嘆ふ。母三年を経て、儻倅たちまに病を得、命終の時に臨み、子を撫で閉を啜ひて、斯く言ひき。『我、生々の世に常に生れて相はむ』といひて、隣家の女に生れ、終に子の妻と成り、自が夫の骨を祠りて、今慕ひ哭く。本末の事を知るが故に、我哭けらくのみ』とのたまへり」と者へるは、其れ斯れを謂ふなり。

〔靈異記〕 中巻第四十一縁

9は蛇と女との異類婚姻譚を語る説話であり、出典の不明な經典からの引用部分である。仏と阿難は墓の前で泣く夫婦と会う。この夫婦は前世において母と息子の関係なのであり、前世で母（現世の妻）は息子（現世の夫）への愛執によって転生し、隣の家の子に生まれて、成長した息子の妻となる。この夫婦の関係は、前世での「愛心」の結果による悪因であり、死んだ家族を偲んで二人は墓の前で泣いているのである。ここで、夫婦における愛執の因縁を知った仏は「音を出して嘆く」とある。『靈異記』では「和泉国の海中にして樂器の音声有りき。」（上巻第

五縁、「蘇めて弟子を喚ぶ。弟子声を聞き」（中巻第七縁）、「心経を誦する音、甚だ微妙にして、諸の道俗の為に愛樂せられき」（『靈異記』中巻第一九縁）の諸例があり、樂器の「音声」の他、人の声なども「音」と表記する。仏は夫婦の悪因について「本末の事を知るが故に、我哭けらくのみ」とあることから、ここにおいての「音」とは仏の悲しみと慟哭に伴った嘆きの音であろう。9の仏の「音」と本縁の行基の詠歌を同列に扱うことはできないが、ここでは悲しみにおける「哭」と音との関係性に注目したい。このような僧の「音」による営みが仏教説話に記されることの効果について、『梁高僧伝』安世高の伝を確認したい。

10. 高曰く、「故に來りて相度す。何ぞ形を出さざる。神曰く、「形甚だ醜異なり、衆人必ず懼れん」。高曰く、「但出でよ、衆人怪まじ」と。神、床後より頭を出す。乃ち是大なる蟒なり、尾の長短を知らず。高の膝邊に至る。高之に向ひて梵語數番・讚頌數契す。蟒悲淚雨の如く、須臾にして還隱る。高即ち絹物を取り辭別して去る。船侶帆を颺ぐるや、蟒復身を出し山に登りて望む。衆人手を挙げて然る後乃ち滅す。

〔梁高僧伝〕 卷第一、安世高

10は安世高と前世で同学であった者との再会の場面である。しかし、再会した同学は性格の高慢さから死後に「蟒」である蛇の身を受けて蛇神として祀られていた。安世高は「之に向ひて梵語數番・讚頌數契す」として蛇に向かつて「讚頌」を歌う。後に蛇神は死に、安世高の前には蛇神の身を脱した少年（同学）が現れる。ここでは、「梵語數番・讚頌數契」によって蛇神に

涙を流させて、前世での罪による蛇神の身から救う。この「讚唄」とは、節をつけて經典の一節を歌う梵唄と解されており、安世高が讚唄によって蛇神を救済させたこと、つまり、歌による徳を「高僧伝」は記しているのである。同じく「梁高僧伝」卷十三卷の経師篇は転読や梵唄などを得意とする僧の伝記を収載する。そこには「夫れ聖人の樂を制する、其の徳四あり。天地を感じしめ、神明に通じ、万民を安んじ、性類を成すなり」と、聖人が音楽を制作するに四つの徳があるという。音楽によって天地の神を感じさせ、神明と通じるといふ。音楽を以て神をも感応させることができるのであり、韻律を伴った言葉は呪力として機能すると記述されているのである。先の10、安世高伝における「梵語数番・讚唄教契」は蛇神を救済せしめた安世高の偉業と靈験を語る意味づけがあるだろう。ではなぜ、僧に音や詠歌が必要とされたのだろうか。

11. 夫れ音楽の感動は、古よりして然り。是を以て玄師の梵唱に、赤雁は愛して移らず。比丘の流響に、青鳥は悦びて翫ぶを忘る。(中略)鳥獣だも猶感を致す、況んや乃ち人神なる者をや。但、転読の懿たる、貴きは聲文両ながら得るに在り。若し唯聲のみにして文あらず、則ち道心以て生ずるを得る無く、若し唯文のみにして聲あらずば則ち俗情は以て入るを得る無し、故に經に「微妙の音を以て仏徳を歌歎す」と言ふ斯の謂なり。(『高僧伝』卷十三、経師篇)

11は、音楽が人に感動を与えることと、その機能について述べるものである。梵唱の巧みな者の声を赤雁は好んで他所に移ろうとはせず、比丘の流れるような響きの転読に青鳥は悦び飛

ぶことを忘れる。このように鳥や獣も音楽に感動を覚えるのだから、人間や神ならば尚のことであるという。そして転読には「貴きは聲文両ながら得るに在り」と声と文章との両方を得ることが重要なのであるという。「唯聲のみにして文あらず」では道心の生じることが無く、その反対では、「欲情」を持った人間、即ち衆生は經典の意を得難くなるという。さらに「無量寿經」を引用して韻律と經典の言葉の二つを重視すべきであることを述べる。このように、『高僧伝』において僧が梵唄を歌うことの行為には韻律と經文の両者が必要であり、それは僧の徳であることが理解される。

ここで本縁と行基の歌に立ち返って、行基が歌を歌うことの意義を考えてみたい。「鳥の邪姪」を見て出家をした信敞がその契機となつた「鳥」と同様に子を捨て、行基の元からも去ることになる。つまり「鳥」は出家への機縁でもあると同時に、信敞をもあらわすのである。だが、行基の歌の後のD評語「鳥の鄙ナル事を示て、領道心を発しつ」やE賛曰「鳥の邪姪を蹴て俗塵を駄ひ背けり」は「鳥の邪姪」を見て厭世の心を起して出家をした信敞を賞賛する。その間に置かれるCの行基の嘆きとその歌は、死んで往生を遂げたと思ひし信敞を嘆き悲しみ、そして散文部で叙述される悪しき鳥を「鳥といふ大をそ鳥」として歌の内部において引き継ぐ。さらに「共にと言ひて」と、言葉の違約について恋歌の表現を用いて詰るのである。こうした信敞への愛惜を行基が歌として詠じることが、散文部で悪しき鳥の行為であった「鳥の邪姪」をDEにおいて、その邪姪こそが信敞の出家の機縁であつたと保証する意味づけがあると考

える。だが一方で「烏の邪姪」を契機として信蔽に去られた妻と子とが存在するのであり、「烏といふ大をそ鳥」の歌とは行基自身の悲しみでありながら、信蔽に去られ子に先立たれた妻の悲しみをも表し、強調したものと考える。

五、おわりに

以上、本稿は『靈異記』中巻第二縁が語る出家譚と死において、行基の歌が歌われる意義を説話と歌に見える「烏」を手がかりとして考察した。行基の歌と類句を持つ『万葉集』東歌は「烏」の詞章を共通し、両歌は相手の不在を歌う。行基の歌は恋歌の表現によって現実とは異なる結果の言葉、すなわち果たされなかった信蔽の言葉を批難しているのである。最後、信蔽に取り残される行基がその悲しみを詠歌によって表出することは説話における叙情性と、韻律を必要とした僧の徳を表現するものであるだろう。そして、散文部の「烏の邪姪」という異様な事態が、出家・往生を遂げるための機縁であると同時に、その機縁によって別離もまた生じるということを示すための歌であったと考える。

注(1) 『靈異記』中巻第三十三縁、下巻第三十八縁。

(2) 『日本靈異記』の引用は、中田祝夫校注『日本靈異記』(新編日本古典文学全集10、小学館、一九九五年)に拠るが、私に改めた箇所がある。

(3) 松浦貞俊校注『日本靈異記』(続日本古典読本2、日本評論社、一九四四年)。

(4) 注2中田氏、23頁、頭注。

(5) 狩谷掖斎『日本靈異記攷證』(『狩谷掖斎全集』日本古典全集刊行会、一九二五年に所収)。

(6) 鹿持雅澄『南京遺響』(近藤瓶城『統史籍集覽』近藤出版部、一九九六年に所収)。

(7) 松浦貞俊氏は「袖中抄」(巻八)が引く歌に合せて「こを見て」と信蔽が烏の邪姪の行爲を見たものように解釈する。また、小泉道氏は真福寺本当該箇所を「能米」と認めつつ、来迎院本『靈異記』によって「のみ」と校訂した。来迎院本原裝複製の当該箇所は「乃□」(□は破損)と判断したが破損が著しいため決定し難い。その他の諸本は、群書類従本「能米」、石塚龍磨本は「落字」とあり、「コトヲミテ」と傍書する。

(8) 多田一臣校注『日本靈異記』中(ちくま学芸文庫、一九九七年)。

(9) 小泉道校注『日本靈異記』(新潮日本古典集成67、新潮社、一九八四年)。また、歌の原型については小林真由美氏が詞章の「共にと言ひて」から、浄土願生の歌として解釈された結果、信蔽の死に際した説話の文脈に挿入されたと指摘する。(小林真由美「烏といふ大をそ鳥の」(説話論集第五集「仏教と説話」精文堂、一九九六年)。

(10) 『万葉集』の引用は中西進『万葉集 全訳注原文付』一〜四(講談社文庫、一九七八年)に拠る。

(11) 近藤信義「音喩の構造」(『音喩論』おうふう、一九九七年)。

(12) その他、「大汚鳥」(『代匠記』初・精)や「大遅鳥」(『万葉集管見』)、「大食鳥」(『拾穂抄』)など、烏の生態に寄せ

て捉えられている。

- (13) 「大をそ鳥」について、中田祝夫氏は新編全集本まで一貫して「大嘘つきの鳥」との注を施しており、説話Aの信蔽の違約と行基の歌の下二句「共にと言ひて先だち去ぬる」との関連を重視するためと思われる。

- (14) 『性靈集』（弘法大師空海全集）（筑摩書房、一九八四年）には「林鳥猶反哺を知る」（巻七）や「智無き鳥類も亦親恩の孝を懐く」（巻八）とあり、鳥は孝養を知る鳥とされる。『靈異記』中巻第十縁の鳥も本縁の鳥も漢詩文における鳥の姿とは差異がある。

- (15) 『靈異記』下巻第八縁は「瑜伽論を写さむとし、願を発し未だ写さずして淹シク年を歴たり。家財漸く衰へ、生活くるに便無し。家を離れ妻子を捨て、道を修し祐を求めき。」と、瑜伽師地論を写経する願いが故に妻子を捨てた男の話である。男の行為は明確に妻子を「捨て」たと記述されるが、男の願が弥勒菩薩へ感応した靈験として纏められている。男の行為は「願主は下の苦縛の凡地に在りて、深く信じ祐を招くといふことを。」と、苦しみで縛られた人間の住む世界にありながらも信心によつて写経を達成したとどのように賞賛される。『靈異記』の態度として親が子を捨てたとしても、その理由が仏道修行等であれば賞賛する型式を取るようである。

- (16) 『大正蔵』（巻五十、三三三c 10—三三三c 16）。訓読文は、『国訳一切経 中国撰述部、史傳部七』（大東出版社、一九三五年）に拠る。以下同じ。

- (17) 吉川忠夫・船山徹訳『高僧伝（一）』（岩波書店、二〇〇九年）。

- (18) 『大正蔵』（巻五十、四一四c 29—四一五a 01）。

- (19) 『大正蔵』（巻五十一、四一五a 25—四一五b 06）。

- (20) 『無量寿経』の「以微妙音歌歎仏徳」（『大正蔵』巻十二、二七三c 12—二七三c 13）に該当。

- (21) 『靈異記』以降に時代を下れば『三宝絵』上巻、『日本往生極楽記』巻一に行基と婆羅門僧正との贈答歌と説話が見える。本縁の行基の歌は仏教語が詠まれないものの、このような仏教歌謡としての萌芽的な要素を持つものと思われる。